

指導行政のポイント

再び問題となった“学級崩壊”

菱村 幸彦

群馬県桐生市で発生した小学6年生(女児)の自殺事件について、両親が子どもの自殺は学級崩壊のなかで起きた「いじめ」が原因だと訴えている。

学級がうまく機能しない状況

で、このところ、マスメディアは、いじめ問題に併せて学級崩壊問題も取り上げている。例えば、毎日新聞(11月22日付)は、全国で22県は学級崩壊の実態調査を一度もしていないこと、27都府県は学級崩壊の対応マニュアルを備えていないことなどを報じて、学級崩壊への対応の遅れを批判している。

では、学級崩壊に対して学校はどう対応すべきか。この問題を考えるにあたっては、10年前に国立教育政策研究所がまとめた調査報告書「学級経営をめぐる問題の現状とその対応」(以下「報告書」)が参考となる。そこで、以下に報告書を紹介しながら、学級崩壊の対応について考えてみよう。

報告書は、学級崩壊という言葉がジャーナリスティックな表現であり、安易にこの言葉を使用して認識を進めると、状況を見誤るおそれがあるとして、「学級がうまく機能しない状況」という表現を用いている。この場合、「学級がうまく機能しない状況」とは、「子どもたちが教室内で勝手な行動をして教師の指導に従わず、授業が成立しないなど、集団教育という学校の機能が成立しない学級の状態が一定期間継続し、学級担任による通常の手法では問題解決ができない状態」と定義している。

報告書は、105の学級がうまく機能しない事例を取り上げ、問題状況の要因が類似しているものを10の類型に分類している。ここでその詳細を述べる紙幅はないので、要点だけ紹介すると、学級がうまく機能しない状態としては、「教師の学級経営が柔軟性を欠いている事例(74学級)」が最も多く、次いで「授業の内容と方法に不満を持つ子どもがいる事例(65学級)」が続き、さらに「いじめなどの問題

行動への適切な対応が遅れた事例(38学級)」「校長のリーダーシップや校内の連携・協力が確立していない事例(30学級)」などとなっている(原因は複合しているので複数回答となっている)。

担任に任せないで組織で対応する

学級がうまく機能しない状況への対処について、報告書は、早期の実態把握と早期対応、子どもの実態を踏まえた魅力ある学級づくり、ITなどの協力的な指導体制の確立と校内組織の活用、保護者などとの緊密な連携と一体的な取り組み、教育委員会や関係機関との積極的な連携を挙げている。

こうした措置はいずれも大切である。が、もう1つ重要なポイントとして、校長のリーダーシップと組織としての対応を挙げたい。

学級崩壊への対応は危機管理の問題である。危機管理で重要なことは、組織のメンバーがばらばらに対応しないで、トップのリーダーシップのもとに全員が一致協力して、ことに当たることである。

しかし、学校ではそうした体制がなかなか組めない。学校では、ともすると学級経営は個々の学級担任に委ねられ、他の教師はもちろん、校長や教頭といえども口出ししにくい雰囲気がある。学級経営が平穩無事であらうまうまうしているときは、それはそれでいいのだが、学級のなかが荒れ、集団教育として機能しないような状況に立ち至った場合は、学級担任の運営に任せておいては、事態の解決は難しい。

危機管理では、リーダーの陣頭指揮が不可欠である。ふだんは部下に仕事をまかせていても、いざとなればリーダーが率先して先頭に立つ覚悟と行動力が求められる。学級崩壊が起きたような場合は、まさに校長のリーダーシップの下に組織をあげて取り組むことが欠かせないのだ。

(ひしむら・ゆきひこ = (財)学習ソフトウェア情報研究所 理事長)

本紙は、<http://www.kyouiku-kaihatu.co.jp> でも掲載

●11月27日発売！ 基礎から始める管理職選考合格対策！ A5判／200頁／定価2,520円

『基礎から始める学校管理職選考重点対策テキスト』 教育開発研究所【編】

教育行政からみた体験的戦後教育史『戦後教育はなぜ紛糾したのか』菱村幸彦【著】